

# NEWS

JAAF

HIROSHIMA

陸協ひろしまニュース

一般財団法人 広島陸上競技協会

第74号

H24.12.23発行

Ayako Kimura  
木村 文子



## 広島陸上界の 系譜を受け継ぐ



Takumi Saito  
西塔 拓己



Ryota Yamagata  
山縣 亮太

## 広島陸上界の系譜を受け継ぐ

### 西塔 拓己 | 男子20キロ競歩 | 東洋大学 | Takumi Saito

プロフィール | 西塔 拓己(さいとうたくみ) 176cm / 60kg  
1993年(平成5年)3月23日生まれ / 能美中-広島商業高校-東洋大学  
自己ベスト | 10000mW : 40:11.71 (2012.10 国体)=ジュニア日本記録  
20kmW : 1:21:01 (2012.2 日本選手権競歩)

### 山縣 亮太 | 男子100m-4×100mR | 慶應義塾大学 | Ryota Yamagata

プロフィール | 山縣 亮太(やまがた りょうた) 176cm / 68kg  
1992年(平成4年)6月10日生まれ / 修道中学校-修道高校-慶應義塾大学  
自己ベスト | 100m : 10.07 (2012.8 オリンピック) 日本歴代4位  
200m : 20.62 (2011.5 関東インカレ)

### 木村 文子 | 女子100mH | エディオン | Ayako Kimura

プロフィール | 木村 文子(きむら あやこ) 168cm / 52kg  
1988年(昭和63年)6月11日生まれ / 可部中-祇園北高校-横浜国立大学-エディオン  
自己ベスト | 100mH : 13.04 (2012.4 織田幹雄記念国際)=日本歴代3位  
走幅跳 : 6m17 (2010.5 第89回関東学生陸上競技対校選手権大会)  
100m : 11.95 (2012.10.6 岐阜国体)



日本がオリンピック(五輪)に参加して100年目の2012年夏、広島で生まれ育ったアスリートが、ロンドンで新たな扉を開いた。男子短距離の山縣亮太(慶大、修道高出)、20km競歩の西塔拓己(東洋大、広島商高出)、そして女子100m障害の木村文子(エディオン、祇園北高出)。世界に挑んできた広島陸上界の系譜を受け継ぐ3人が、五輪という最高峰のレースで歴史をつむいだ。

\*

「世界のファイナル」。男子100mを疾走した山縣には、その夢を感じた。予選でいきなり、銀メダリストのヨハン・ブレイク(ジャマイカ)と同じ組。だが20歳のスプリンターは平然と、最高のパフォーマンスを発揮した。滑らかなスタートで五輪のトラックに駆け出し、日本歴代4位タイの10秒07をマーク。五輪日本選手史上最速タイムで驚かせると、圧巻は準決勝だった。

ブレイク、そしてタイソン・ゲイ(米国)に挟まれたなか、30mまでは「世界」をリード。硬くなった後半、さすがに逆転を許したが、「世界のファ

イナリスト」の道が、確かに見えた。つけた勢いと自信は、400mリレーでも発揮した。第1走者として日本をけん引すると、堂々の5位入賞。初の五輪で、日本のエースへ一気に躍進し、「個人もリレーも世界のファイナル進出へ確かに戦える手応えを感じた」と口にした。

\*

その山縣と同年ながら、全く違う軌跡を歩み、ロンドンにたどり着いたのは西塔だ。広島商高では、たった1人の競歩部員だった。練習場所は学校近くの河川敷。自らの影でフォームをチェックし、歩き続けた。江田島市の能美中時代は、県大会出場もままならなかった長距離部員。一步、一步、努力を重ね続けた道は、夢を見ることすらなかった世界の舞台へと、五輪へとつながった。

「びびって眠れなかった」というロンドンでのレース。世界の曇り空に飲まれ25位に終わったが、バッキンガム宮殿を「耳がキーンとなるほどの大声援」のなか、果敢に歩を進める攻めの



レースを展開した。一時、先頭集団に立つなど、さらに4年後へ、自らの足跡を残したウォーカー。「この年齢で経験できたのは大きい。世界選手権、次のリオデジャネイロ五輪、これから先、どんどん出場したい」と夢を大きくした。

\*

アスリートとして描く夢。木村は「広島から世界に羽ばたきたい」と口にし、それをかなえた。広島陸上界からの五輪女子代表は、1976年モントリオール五輪の走り高跳びに出場した曾根幹子(現広島市立大教授)以来。「世界の舞台で戦えることを証明するチャンス。攻めるレースをする」。胸に刻んだ思いは、レースに表れた。

予選1組。勢いよく飛び出すと、1台、2台とハードルを越えていく感覚は、今までにないものだった。「こんなに速く動ける、いいリズムでいける自分に初めて会った」。だが、未体験のスピードに乗れば、リズムを合わせにくくなるのが



ハードル競技の難しさ。「(ハードルを)さばききれなかった」と7着でフィニッシュした。世界で初勝負。苦さを残した中、「前半で置いていかれると思ったけど、戦えるなという感覚はあった」。女子トラック種目では、広島で初の五輪代表。「私は日本の代表であり、広島の代表」。その矜持で世界のトラックを踏んだ。

\*

3人が駆け上がった五輪の舞台。その礎には、織田幹雄(広島県海田町出身)がいる。1928年アムステルダム五輪の男子三段跳びで、日本人初の金メダルを獲得した先駆者が、もっと速く、もっと遠く、もっと強くと、自らをかき立てた陸上への情熱や探求心…。「陸上の神様」が残した偉業や思いは、広島に脈々と流れ、染み渡る。

男子400m障害の日本記録保持者、為末大(皆実高出)は、現役を引退する前、織田が残した日記を手にした時、そこに自らの生きざまを読み、「つながっている」と感じたという。その為末が4大会連続出場を狙い、敗れ去った五輪の道を、彼らは歩いた。広島から世界へ。織田が築いた道は、しっかりとつながっている。

(N)



# 恩師たちのロンドンオリンピック観戦記



▲左から松崎先生、秋山先生、松澤先生

## ～西塔選手の今後に期待～

あわただしいオリンピック観戦でした。ヨーロッパでの競歩人気に加え、オリンピック=お祭りの特別な大会だということを実感させられました。西塔選手には、まだ若いので怪我をせず、じっくり鍛えて世界選手権、オリンピックと多くの国際大会を経験してもらいたい、競技力の向上とともに、人間的にも成長して欲しいと思います。

県立広島商業高校 秋山 定之

## ～木村選手に感謝～

大阪世界陸上と比べ会場へのアクセスや入退場がとてもスムーズでした。セキュリティも厳しいはずなのに役員たちの陽気でフレンドリーな雰囲気で物々しい

感じはしませんでした。木村選手のおかげで30年ぶりにロンドンを訪れることができ幸せでした。これからも世界の更上のレベルを目指して頑張っていきたいです。

広島井口高校 松崎 親男

## ～ロンドンで山縣選手の走りに感動～

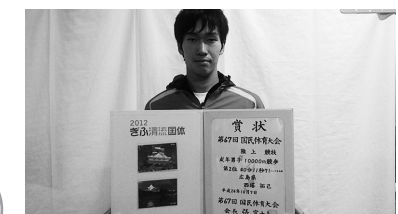
世界大会の観戦は、1991年東京の世界選手権以来でした。国立競技場での感動が、ロンドンでの感動に変わりました。山縣選手の予選でのベスト・準決勝でのサードベストの走り、決勝への夢ではない確かな手応えを感じました。これからも山縣の走りを見ていきたいです。

修道高校 松澤 慶久

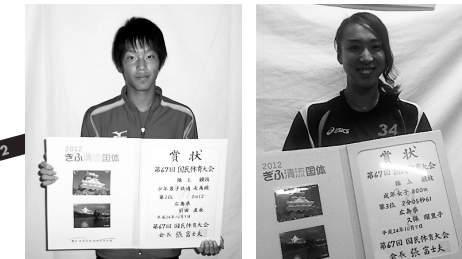
October  
8  
Mon  
4目

第4日目、まずは成年男子400mに浦野晃弘(早大)が7位と健闘。その後、少年女子100mHでは、故障を押して足に痛々しいテーピングを巻いて頑張った福部真子(広島皆実高)が悔しい4位、続く少年男子A110mHの高山峻野(広工大高)は3位に入賞し、インターハイのリベンジを果たした。投擲では、出場した国体にはすべて入賞している成年男子やり投げの池田康雄(Team Big Stone)がベテランの味を出して今期ベストで5位に入賞した。

October  
7  
Sun  
3目



▲西塔拓己選手



▲前田直哉選手

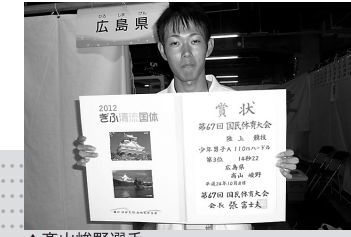
▲久保瑠里子選手



▲浦野晃弘選手



▲福部真子選手



▲高山峻野選手



▲池田康雄選手



ミナモ

第67回国民体育大会

# ぎふ清流大会 ぎふ清流国体 2012 おいしい!広島

本年度の国民体育大会は10月5日から9日まで岐阜メモリアルセンター陸上競技場で開催された。選手・監督・コーチ・ドクター 41名が一致団結し、「チーム広島」で挑んだ。

## Team HIROSHIMA

Photo Album



▲監督デザインのTシャツでピース!



▲チーム丸で応援



▲入賞者がでる度に結果の張りだし



▲「頑張れ!ひろしま」の横断幕のもとで監督打ち合わせ

公益財団法人日本陸上競技連盟栄章の表彰があり、広島県から14名が表彰された。



▲秩父宮章を受賞した東川安雄先生



▲左から高校優秀指導者章を受賞した松澤慶久先生、中学優秀指導者章を受賞した馬屋原浩之先生



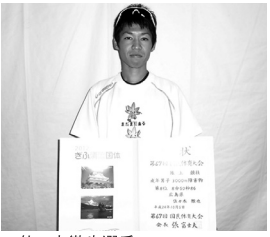
▲勲功章を受賞した山縣亮太選手と競技者育成章を受賞した藤本法生先生

October  
5  
Fri  
1目

第1日目、成年の選手が大活躍、成年女子ハンマー投げで渡邊茜(九州共立大)が5位、成年男子3000m障害で佐々木徹也(中電工)が8位に入り、勢いをつける。



▲渡邊茜選手



▲佐々木徹也選手

October  
6  
Sat  
2目

第2日目、昨日の少年女子1500mで予選通過した小吉川志乃舞(三原第五中)が有言実行(4分30秒切る)の自己新記録で7位と大健闘。続く成年男子走高跳で富山拓矢(鶴学園クラブ)は足の痙攣の中、痛みをこらえての跳躍

で7位に入賞した。その後の成年女子100mには木村文子(エディオン)が登場。専門外の種目ながら、オリンピック選手の意地を見せ、準決勝・決勝共に自己ベストで8位と健闘。



▲小吉川志乃舞選手



▲富山拓也選手



▲木村文子選手

私は岐阜国体では100mとリレーに出場させて頂きました。専門種目ではありませんでしたが、広島県に少しでも貢献したいという想いで走り100mで8位に入賞することができました。決して満足のいく結果ではありませんでしたが、少しでも広島県チームに貢献出来たことがとても嬉しかったです。

このような自然に広島県チームで頑張ろうと思える雰囲気であることが、今回の総合結果です。コーチの先生方をはじめ、そして選手全員がコミュニケーションをとりながら日に日にチームの絆が強まっていきました。

シーズンの最後にチーム広島の一員として国体で走ることが出来て良かったです。今後もより一層この絆を深めて団体総合優勝を狙ってきたいと思います!

### 木村選手からのメッセージ



October  
9  
Tue  
5目

最終日、昨日の少年男子3000mで予選通過した山口竜矢(世羅高)が、広島県選手団の大声援の中、積極的なレースで先頭を引っ張り7位に入賞した。すべての日程において入賞者を出したが、今大会は4種目で9位、優勝ゼロという広島県観光協会のキャッチフレーズ「おいしい!広島」を思わせる結果となった。最後に、応援してくださった全ての皆様に感謝するとともに、来年の東京国体に向け今シーズンの課題を整理し、続けて選手強化を図っていききたい。



▲山口竜矢選手



# 年代別レポート

## 小体連

第28回全国小学生陸上競技交流大会が8月24日(金)25日(土)に神奈川・日産スタジアムで行われた。7月の広島県予選で1位となった14種目22名で広島県選手団を結成し、チーム広島として一致団結し、競技してきた。広島陸協の皆様を始め、関わってくださった方々には、様々なご支援をいただきありがとうございました。

結果は、入賞0、準決勝進出4、自己ベスト記録5という素晴らしい結果に終わったが、その中で選手は様々なことを感じ、学ぶことができた。目標とする大会でベスト記録を出す難しさ、全県から集まった仲間と寝食を共にする楽しさ、最高の舞台で競技できる喜び、思うような結果が出さなかった悔しさ、お世話になった人への感謝の気持ち・・・など。このような数え切れない宝を広島に持ち帰った。

また、ロンドンオリンピック代表で、広島県選手団の大先輩である山縣亮太選手が広島県チームのところにきて下さり、激励をしてくださいました。



な夢を持ってがんばりたいという気持ちより強く持つことができました。

今後とも小学生への陸上競技普及に対して、ご指導・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

海田小学校 石川 和明



## 中体連

今年度の全中は千葉県で行われた。予選会となる県通信陸上および県中学校選手権で注目されたのは男子長距離と女子ハードルである。男子3000mでは9名が標準記録を突破した。昨年、都道府県対抗男子駅伝でも活躍した新迫志希君(志和中)を中心にレースを展開し多くの突破者が誕生した。一方、女子100mハードルは複数の選手が春から好記録を出している期待の大きい種目。県中学校選手権の決勝では8人全員14秒台という驚きのレースだった。その結果、6名が標準記録を突破した。3000m9人、ハードル6人の全中参加は全国でもトップレベルの参加数である。

千葉全中では男子3000mで新迫君が第3位、女子1500mで小吉川志乃舞さん(三原第五中)が第4位に入賞した。女子100mHでは小川瑠さん(長江中)が決勝進



出まであと0.02秒と惜しい結果だった。惜しくも入賞は逃したが安田夏生さん(五日市中)は四種競技で第9位、角本勇樹君(西条中)が400mと400mRの2種目で活躍が目立った。また、小吉川さんは10月の岐阜国体でも少年B1500mで7位入賞と活躍した。

もう一つの全国大会でもあるジュニアオリンピックでは山下雄大君(神辺東中)が2年100mで第2位、吉田圭太君(高屋中)が2年1500mで第3位、新迫君も3年3000m第3位、湯浅佳那子さん(熊野中)が3年100mHで第5位に入賞した。

このような活躍を支えているのは各中学校で献身的に指導して下さる指導者の方々をはじめ、学校同士の切磋琢磨、中高ジュニア合宿や県外合宿、全中合宿など支援して下さる広島陸上競技協会のおかげと大変感謝している。

矢野中学校 濱村 祥水

## 高体連

### 2012北信越がやぎ総体

#### 第65回全国高等学校陸上競技対校選手権大会

～君は今 希望とともに 緑の大地をかけぬける～

平成24年7月29日(日)～ 8月2日(木)までの5日間、新潟県新潟市東北電力ビッグスワンスタジアムにおいて、高校生最高峰のステージであるインターハイが開催された。連日、北信越新潟においても容赦ない暑さの中、その暑さに負けず高校生の真剣勝負である熱き闘いが繰り広げられた。

我が『チーム広島』は、中国地区ブロック大会を勝ち抜いた男子51名、女子16名の計67名、参加19校で熱き闘いに挑んだ。

結果は、

- ◎女子100mH 優勝 福部 真子(広島皆実2) 13.74(+0.8)
- ◎女子400mH 2位 坪浦 諒子(県立広島3) 59.06
- ◎男子3000mSC 4位 宮城 壱成(世羅3) 9.00.31
- ◎男子やり投 5位 道上 雅晃(安芸3) 64.11
- ◎女子400m 7位 坪浦 諒子(県立広島3) 56.42

以上、5種目4名が見事に入賞することができた。また、福部さんは昨年に続きインターハイ2連覇を達成し、坪浦さんは2種目入賞を果たし、400mHにおいては中国記録を更新した。

熱き闘いを繰り広げている中で、インターハイ入賞者はもちろんのこと、『チーム広島』の入賞者たちにも言うことだが、全国の舞台で自己記録を更新する力を持ち備えている、即ち、周到な準備をして大会に臨んでいるということだ。また、いかなる条件下においても開る強い精神力をも兼ね備えているということである。

今年度のインターハイを振り返ってみると、我が『チーム広島』は、参加人数、参加校ともに昨年度より減少した。また、インターハイ入賞種目、入賞者数も減少した。

来年度に向けて、強い『チーム広島』を創り上げていくことができるように、高体連の合宿を充実させて頑張りたい。また、中高ジュニア合宿など、広島陸上競技協会の方添えをいただきながら取り組んでいけたらと考えている。来年の大分インターハイに向けて、頑張りたい。

広島県高等学校体育連盟陸上競技部競技力向上委員長 広島県立広島皆実高等学校 樋口 裕志

## 学生連盟

10月26日から28日にかけて第35回中国四国学生陸上競技選手権大会が、広島ビッグアーチで行われた。広島の子学連からの優勝者は男子が5名、女子が4名であった。女子3000SCでは横田知佳選手(広島大1年)、女子10000m競歩では金崎葵選手(広島大2年)が、それぞれ大会記録での優勝を果たすなど、地元開催ということもあり広島勢は多くの好記録を残した。男子10000mでは相葉直紀選手(広島大4年)が2位以下を引き離し優勝した。相葉選手は、9月22日に道後山高原クロカンパークで行われた第44回全日本大学駅伝対校選手権大会中国四国地区予選会でも、独走状態のままゴールを駆け抜け、



(中国四国地区予選会スタート時)

見事チームを優勝へと導いた。2位は妹尾良平(修道大3年)、3位は丸山尚道(経済大1年)と、両者ともに好記録でゴールし、中国四国学連選抜チームで第24回出雲全日本大学選抜駅伝競走への出場を果たした。

今年も多くの広島勢が活躍した年となった。来年も今年に負け劣らない結果を残し、広島の上陸競技を盛り上げていきたい。

中国四国学生陸上競技連盟広島支部 幹事長 広島修道大学 宗高 史佳

## 実業団連盟

オリンピックイヤーの今年、8月のロンドン五輪に木村文子選手(エディオン)が女子100mHに日本代表として出場したのをはじめ、当連盟所属選手が各大会で活躍をした。

第96回日本陸上競技選手権(6月8日～ 10日/大阪)では、女子800mで久保瑠里子選手、女子100mHで木村文子選手、女子3000mSCで荒井悦加選手のエディオン勢3選手が見事優勝した。そして第60回全日本実業団対抗陸上(9月21日～ 23日/博多)では、女子800mで久保選手が4連覇を達成。男子5000mチャールズ・ディラン選手(JFEスチール)、男子走高跳富山拓矢選手(鶴学園)、女子100mH木村選手の3選手が第2位に入賞し健闘した。

また、ロードでは10月6日にブルガリアで開催された第20回世界ハーフマラソンに岡本直己選手(中国電力)が日本代表として出場した。

そして、11月18日に中国実業団対抗駅伝競走大会(世羅)が、10月28日に実業団女子駅伝西日本大会(宗像)が開催され、次の5チームが全国大会の出場権を獲得した。

- ◎第57回全日本実業団対抗駅伝競走大会(1月1日/前橋)―中国電力、マツダ、JFEスチール、中電工
- ◎第32回全日本実業団対抗女子駅伝競走大会(12月16日/仙台)―エディオン

今期の駅伝・マラソンでの実業団選手の奮起を期待したい。

広島県実業団陸上競技連盟 事務局 JFEスチール 山下 里恵

## マスターズ連盟

今年度の第33回全日本マスターズ陸上はお隣の「岡山カンコースタジアム」で初めて開催されました。中国5県でしんがりの開催県となったが非の打ちどころのない素晴らしい大会運営で選手の皆さんも気持ち良く競技できた。

マスターズ関係者を始め、県陸協、関係諸団体の連携プレーは広島マスターズとしても大いに参考にしたいものだった。隣県と言う事で開催県に次ぐ大会参加者数の広島だったが中でも女性陣の活躍は素晴らしいものだった。日本新記録6個(W30 400mH 福島美奈、W40 円盤投 山口智子、W45 槍投げ 齋藤いつみ、M40 円盤投 大石博暁、M60 60m 河田慎司、M85 3000mW 天野孝三)

マスターズ陸上は、「青春の灯は燃ゆ」の言葉通り、若き日燃やした、あの熱き心を蘇らせて再びグラウンドに立つ…かつての走友仲間との再会で「筋力に再点火する」そんな場でもあり語り合いの場でもある。

陸上競技への思いを持ち続けているかつてのアスリートの皆さん、冬季練習から少しずつ始めて、新しいシーズンにお会いしましょう。

広島マスターズ陸上 広報 前田 征四郎

## 青少年の夢を応援します!

### 青少年健全育成協力企業

- 株式会社サタケ
- 旭化成株式会社
- 広島総合警備保障株式会社
- 株式会社大前工務店
- 広島駅弁当株式会社
- 広島電鉄株式会社
- 有限会社ニシヒロ
- 株式会社アシックス
- 中国電力株式会社
- 株式会社広島銀行
- 学校法人石田学園
- 株式会社道後山高原サービス
- 広島ガス株式会社
- 株式会社中電工
- 株式会社HOST
- 株式会社イズミ
- 株式会社もみじ銀行

(順不同)



平成24年度

文部科学大臣表彰受章祝賀式
(公財)日本陸上競技連盟表彰受章祝賀式
(公財)広島県体育協会体育賞(功労者の部)表彰受章祝賀式
(一財)広島陸上競技協会(功労章・優秀選手賞・新記録賞)表彰式

文部科学大臣表彰(生涯スポーツ功労者)
佐々木 英夫(科学委員長)

公益財団法人日本陸上競技連盟栄章

- 秩父宮章 東川 安雄(専務理事)
高校優秀指導者章 松澤 慶久(修道高校教諭)
中学優秀指導者章 馬屋原浩之(向丘中学校教諭)
高校優秀選手章 北村 拓也(広島皆実高校→早稲田大学)
中学優秀選手章 山口 竜矢(向丘中学校→世羅高校)
勲功章 山縣 亮太(慶應義塾大学)
競技者育成章 日山 正光(広島JOC)
競技者育成章 藤本 順子(広島JOC)
競技者育成章 藤本 法生(広島JOC)
競技者育成章 有田 慶彦(修道中学教諭→福吉小教諭)
競技者育成章 松澤 慶久(修道高校教諭)
競技者育成章 廣重 陽介(おかもと整形外科)
競技者育成章 白石 宏(白石鍼灸治療院)
安藤百福記念章 末田 伸男(大崎水泳陸上クラブ)

公益財団法人広島県体育協会体育賞

- [功労者の部]
●田川 司(広島陸協) ●川口 稜示(広島陸協)
●原 博昭(広島市) ●光橋 扶(東広島市)
●松岡 康次(福山市)

一般財団法人広島陸上競技協会

- [功労章]
●重末 道則(広島市) ●土路 重和(広島市)
●石原 順次(広島市) ●福中 正(大竹市)
●光橋 扶(東広島市) ●松井 一清(庄原市)
●田中 俊治(竹原市) ●三藤 義郎(福山市)
●山本 和弥(マスターズ)

公益財団法人広島県体育協会体育賞
一般財団法人広島陸上競技協会

- 優秀選手賞
[国際大会の部]
●福島 美沙希(九州共立大学)
第15回アジアジュニア選手権大会(6月11日・スリランカ)
女子ハンマー投 第3位 50m78
●山縣 亮太(慶應義塾大学)
第30回ロンドンオリンピック競技大会(8月11日・ロンドン)
男子4×100mリレー 第5位 38秒35
[個人の部]
●チャールズ・ディランゴ(世羅高校)
第47回千葉国際クロスカントリー大会(2月12日・千葉)
一般男子12km 34分59秒
●スーサン・ワイリム(世羅高校)
第47回千葉国際クロスカントリー大会(2月12日・千葉)
一般女子8km 26分41秒
●山口 竜矢(向丘中学校)
第17回全国都道府県対抗男子駅伝競走大会(1月22日・広島)
第2区 3km 8分37秒
第47回千葉国際クロスカントリー大会(2月12日・千葉)
中学男子3km 9分16秒
●西塔 拓己(東洋大学)
第28回日本ジュニア選手権長距離・競歩大会(5月3日・石川)
男子ジュニア10000mW 41分20秒30

- 久保 瑠里子(エディオン)
第96回日本陸上競技選手権大会(6月10日・長居)
女子800m 2分04秒18
第60回全日本実業団対抗選手権大会(9月22日・博多)
女子800m 2分06秒97
第52回実業団・学生対抗陸上競技大会(10月14日・小田原)
女子800m 2分05秒33
●木村 文子(エディオン)
第96回日本陸上競技選手権大会(6月9日・長居)
女子100mH 13秒25
●荒井 悦加(エディオン)
第96回日本陸上競技選手権大会(6月10日・長居)
女子3000mSC 9分55秒93
●岡山 沙英子(ポスアル)
第96回日本陸上競技選手権大会(6月8日・長居)
女子走幅跳 6m55
●福部 真子(広島皆実高校)
第65回全国高等学校陸上競技対校選手権大会(8月2日・新潟)
女子100mH 13秒74
●仲田 愛(筑波大学)
第81回日本学生陸上競技対校選手権大会(9月10日・国立)
女子棒高跳 4m10
●ジェオセフ・ギタウ(JFEスチール)
第66回福岡国際マラソン選手権大会(12月2日・福岡)
マラソン 2時間06分58秒

第67回国民体育大会入賞の部

- [2位] ●西塔 拓己(東洋大学)
成年男子10000mW 40分11秒71(ジュニア日本新)
●前田 直哉(沼田高校)
少年男子共通走高跳 2m12
[3位] ●高山 峻野(広工大高校)
少年男子110mH 14秒22
●久保 瑠里子(エディオン)
成年女子800m 2分05秒61
[4位] ●福部 真子(広島皆実高校)
少年女子A100mH 14秒14
[5位] ●池田 康雄(Team Big Stone)
成年男子やり投 74m82
●渡邊 茜(九州共立大学)
成年女子ハンマー投 10秒69
[7位] ●富山 拓矢(鶴学園クラブ)
成年男子走高跳 2m09
●小吉川 志乃舞(三原五中)
少年女子B1500m 4分29秒62
●浦野 晃弘(早稲田大学)
成年男子400m 47秒20
●山口 竜矢(世羅高校)
少年男子B3000m 8分34秒74
[8位] ●佐々木 徹也(中電工)
成年男子3000mSC 8分50秒86
●木村 文子(エディオン)
成年女子100m 11秒95

公益財団法人広島県体育協会体育賞

- [新記録の部(ジュニア日本新記録)]
●西塔 拓己(東洋大学)

男子10000mW 40分11秒71
第67回国民体育大会(10月7日・岐阜)

一般財団法人広島陸上競技協会

- [新記録賞]
[県中学生記録]
●新迫 志希(志和中学校)
男子3000m 8分25秒65
第43回ジュニアオリンピック(10月28日・横浜)
●杉之原 光 司(宇品中学校)
男子砲丸投 13m57
第61回広島県中学校総合体育大会(9月29日・広島)
●安田 夏生(五日市中学校)
女子四種競技 2882点
第61回広島県中学校総合体育大会(9月29日・広島)
[県高校生記録]
●高山 峻野(広島工大高校)
男子110mH 14秒10
第65回中国高校陸上競技選手権大会(6月17日・広島広域)
男子110mJH 14秒06
第14回世界ジュニア選手権大会(7月10日・バルセロナ)
●福部 真子(広島皆実高校)
女子100mH 13秒64
第96回日本陸上競技選手権大会(6月9日・長居)
●坪浦 諒子(県立広島高校)
女子400mH 59秒06
第65回全国高等学校陸上競技対校選手権大会(7月29日・新潟)
[県記録]
●山縣 亮太(慶應義塾大学)
男子100m 10秒07
ロンドンオリンピック(8月5日)
●西塔 拓己(東洋大学)
男子10000mW 40分11秒71
第67回国民体育大会(10月7日・岐阜)
男子10kmW 40分14秒
第95回日本陸上競技選手権大会競歩大会(2月19日・神戸)
男子20kmW 1時間21分01秒
第95回日本陸上競技選手権大会競歩大会(2月19日・神戸)
●富山 拓矢(鶴学園クラブ)
男子走高跳 2m23
広島県学連競技会(9月9日・広島スタジアム)
●日浦 誠治(東海大学)
男子十種競技 7026点
第81回日本学生陸上競技対校選手権大会(9月10日~11日・国立)
●岡山 沙英子(ポスアル)
女子100m 11秒67
第66回広島県陸上競技選手権大会(6月23日・広島スタジアム)
女子走幅跳 6m55
第96回日本陸上競技選手権大会(6月8日・長居)
●木村 文子(エディオン)
女子100mH 13秒04
第46回織田幹雄記念国際陸上競技大会(4月29日・広島広域)
●坪浦 諒子(県立広島高校)
女子400mH 59秒06
第65回全国高等学校陸上競技対校選手権大会(7月29日・新潟)



2005年世界選手権ヘルシンキ大会

「侍ハードラー」為末大選手が引退



誰からも愛された為末選手

広島市佐伯区出身で、男子400m障害の為末大選手がこの夏、スパイクを脱いだ。不世出のハードラーが、小学2年

で出会った「かけっこ」に別れを告げた。五日市中央小5年で競技会デビュー。五日市中、皆実高、法政大、大阪ガス...常に表彰台の真ん中に立った。中学3年の1993年、6種目で中学ランキング1位を占めた。皆実高3年の96年、400mと400m障害で破格のジュニア新記録(45秒94、49秒09)を樹立して地元国体ヒーローに。そして、2度の世界選手権銅、3度の五輪。

しかし、常に日の当たる道ばかりではなかった。膝を傷めて松葉づえで臨んだ中学入学式。希望に燃えた高校の初レー

スで故障し、インターハイの出番は3年の夏まで待たなければならなかった。大学では髪を染め、非難も浴びた。初のシドニー五輪は予選で転倒した。

さまざまな逆境にあっても常に前向きな姿勢を失わず、創意工夫で立ち向かった。度重なる故障を克服し、ち密なトレーニングと勝負への執念を捨てぬアスリート。それが為末大選手の本質である。

「カール・ルイスになりたい」と夢見た、いがぐり頭の少年はそのまま年輪を重ね、世界のハードラーへと成長を遂げた。新たなスポーツビジネスに活路を求めるといふ34歳の決断に、ねぎらいの拍手を送りたい。(W)